

宮川健郎 私の出会った児童文学学者たち 第26回

第6章 鳥越信先生

その1 三つの児童文学史展（上）

1979（昭和54）年11月、鳥越信先生（1929～2013年）が監修した児童文学史展のお手伝いで、鳥越先生といっしょに沖縄に行った。私は、1年浪人して入学した大学院の1年次で、24歳だった。

1979年・沖縄

昨年（2025年）12月のある日、時間をつくって、東京・永田町の国立国会図書館に行った。新聞閲覧室で、マイクロフィルムの『沖縄タイムス』を見る。

1979（昭和54）年11月分のリールをずっと見ていくと、まず、13日の朝刊に大きな広告を見つけた。——「第二回 タイムス ブックフェア——児童文学のあゆみ展——」会期は11月14日～18日、午前10時30分～午後7時、会場はデパートリウボウ6階、主催は沖縄タイムス社、後援は沖縄県教育委員会、沖縄県PTA連合会、沖縄県子どもの本研究会、琉球放送、協賛は沖縄教販（株）だ。那覇のデパートのフロアに子どもの本をそろえて販売する催しである。広告には、販売する各社の本のタイトルが値段とともに書き出されている。売り場のわきのスペースでは、小ぢんまりした児童文学史展も開催された。鳥越信先生がその監修者だった。

つづけて見ていくと、11月16日と17日の夕刊に、鳥越先生と沖縄県子どもの本研究会会長の徳田漁先生の対談「児童図書の選び方」という記事が「上」「下」の2回で掲載されている。「上」のリード文には、こうある。——「……沖縄タイムス社主催の「タイムスブックフェア」を機に来沖された児童文学の権威者である早稲田大学の鳥越信教授と沖縄で読書運動を精力的に進めてきた沖縄県子どもの本研究会会長で小禄小学校校長の徳田漁さんに最近の児童文学の動向を通して、子供たちにどういう読書指導をすべきかなどを語ってもらった。」

「児童図書の選び方」というテーマについて、鳥越先生は、「おもしろい本をどう搜すのか、ある一つの目安として時間的な幅を取ったらわかると思います。」「本当の面白さは二十年、五十年たっても消えない。」とした上で、つぎのように語る。「下」の一節だ。

選び方というのは別に難しいことでもない。まあ、そうですね。二十年置いて、一九五九年前後の作品で今だに読み継がれている本は何かと考えたら一番答えが出やすいでしょう。例えば、「ながいながいペンギンの話」（いぬいとみこ）、「だれも知らない小さな国」（佐藤さとる）、「龍の子太郎」（松谷みよ子）などがそうですね。

鳥越先生があげたタイトルは、いずれも、「現代児童文学」を出発させた作品だ。この年は、「現代児童文学」が成立して20年だったのだ。先生は、しめくくりに、「まず实物に触れてもらう機会を作ることが必要ですね。今開かれているブックフェアの意義もそこにあります。」といって、タイムスブックフェアへと読者を導く。

同じ紙面に、「めずらしい本 いっぱい」の見出しで、そのブックフェアの「児童

「文学のあゆみ展」のことが報道されている。

明治以来、子供の本は「おとぎばなし」「童話」「児童文学」と呼ばれ、その呼び方は時代とともに変わってきています。会場では、それらを①童話・小説②詩・童謡③雑誌④絵本⑤マンガ⑥桃太郎……等、十一のパートに分け、児童文学の流れが目でたどれるようになっています。

（中略）

主な展示品は、観察絵本「キンダーブック」、マンガ「のらくろ伍長」、島崎藤村「ふるさと」、吉屋信子の「花物語」など。書いた人の写真とその人を説明したパネルも展示されています。

『キンダーブック』や『講談社の絵本』など、書影もいくつか掲載されている。私は、すべて当時まだ鳥越先生の自宅の書庫にあった資料によって構成された「児童文学のあゆみ展」の開催にかかわる作業の全部をお手伝いしたのだ。

児童文学のあゆみ展

手もとにある1979年の手帳をもとに、記憶を再現していく。展示会開催まで、展示会にかかわるメモは16ある。一番古いのは、9月20日の「児童文学展打ち合わせ」、場所は「山下」、先生の行きつけの新宿の小料理屋さんだ。私は、このとき、仕事のあらましを聞いて、引き受けたものと思われる。先の新聞記事に書かれていた11のパートは、先生の考えによるものだったが、各パートの解説を書くのが、まず、私のやるべきことだった。

11の解説の執筆は、24歳の私の学力では、なかなかむずかしかったけれども、私は、これは鳥越先生の仕事なのだから、先生の著書を書き写せばいいのだと考えた。まず、鳥越信著『日本児童文学案内 戦後児童文学革新まで』(理論社1963年)をじっくりと読み直した。ひどくぼろぼろになって、いまも身近にある、その本は、1976(昭和51)年発行の第9刷、学部の時代に手に入れて読んだのだ。日本児童文学の簡潔な通史で、「明治期」「大正期」「昭和期(前期)」「昭和期(後期)」の四つの部分にわかかれている。記述は具体的で平明、日本児童文学の全体像がすっきりと頭に入ってくる。先生がまだ30代前半の本だが、名著だと思う。

私は、『日本児童文学案内』を書き写せばいいと考えたが、本の内容を11のパートに振り分け、パートごとに、そのジャンルやテーマの歴史を書いていかなければならない。頭のなかで本をばらばらに解体して再構成することが必要だ。解説は一つが400~600字ほどだったはずで、分量はさほど多くないのだが、私は、それでも、睡眠時間をけずりながら一生懸命に取り組んだ。そして、これは、ほんとうにほんとうに勉強になった。解説の読者は、デパートをおとずれる家族づれなどだから、文章も表記もやさしく、わかりやすく……。

鳥越先生に解説の原稿を見ていただいたのは10月18日、最初の打ち合わせから1か月ほどあとだ。午後4時半に新宿駅東口の喫茶店「談話室滝沢」で待ち合わせた。先生は、横書きに書いた200字原稿用紙をめくりながら読んでくださった。読み終わると、これでいいよ、じゃあ、呑みに行こうかといった。先生は、こういうところは鷹揚なのだが、1字も直されなかったのは不思議だった。まあ、先生の本を書き写したんだからなど、私は思った。実際には、先に書いたような再構成が

必要だったし、短く書かなければならなかつたし、菅忠道著『日本の児童文学 1 総論』増補改訂版（大月書店 1966 年）をはじめ参考文献もいろいろ見たはずなのに、それでも、私は、書き写したと思ったのだ。

この翌々日、今度は、先生のお宅に行って打ち合わせをした。11 のパートに出品する書籍や雑誌などの資料を書庫からピックアップしなければならない。そのときは相談だけで、作業は、10 月末に、やはり、鳥越先生の周辺で勉強している学生ふたりにも助けてもらって行った。

私は、日本近代文学館に行って、展示会場に掲示する作家の写真を手配したりもした。写真や解説原稿を沖縄タイムス東京支社に届けたのが 11 月 2 日、出品リストを持って行ったのは 11 月 7 日だった。この出品リストから、展示資料のキャプションを起こしたのだと思う。写真のキャプションもつくったはずだ。東京支社は銀座にあった。

出品した資料は、70~80 点だったと思うが、復刻版などではなく、全部現物の貴重な資料だったから、美術運輸のお世話になった。書庫から搬出したのは、展示会開催の 5 日前、11 月 9 日だった。

「鳥越史観」の学習

苦労して書いた解説の原稿や出品リストなど、「児童文学のあゆみ展」にかかわる書類は、しばらく、大きな紙袋に入れて保管してあった。ところが、あるとき、紙袋ごと処分してしまった。

1983（昭和 58）年、私が就職して、東京から仙台に引っこした 2 年後、母が、現在私が暮らしている多摩地区の家に引っこした。勉強に必要な本などは、みんな仙台に持つて行ったが、東京の家に置いたままのものもあった。「児童文学のあゆみ展」の書類も、その一つだった。母の引っこしのときには、私も帰京して、片付けなどをいっしょにした。そのとき、紙袋を捨てた。もう、この中のものは、すっかり身についたと思った。何だか、紙袋が抜け殻のように見えたのだ。

それから、さらに、ずっとのちの 2010（平成 22）年、宮崎芳彦さんの『戦後児童文学史の未解決点』（てらいんく）という本が出た。宮崎さんは、白百合女子大学で日本児童文学などを担当した教授で、退職後、2009（平成 21）年に亡くなった。この本は、没後に刊行された遺稿集である。「序 小川未明否定・「少年文学宣言」、双方を否定する」からはじまる、鳥越信や古田足日の仕事を批判的に検討したものだ。「式 鳥越信・共産主義児童文学史批判」につぎの一節がある。

二〇〇一年に、鳥越信編著と銘打った『はじめて学ぶ日本児童文学史』（ミネルヴァ書房一宮川注）が出版されている。鳥越が「はしがき」と「序章」を執筆し、鳥越以外の研究者が一~十八章・「補論」を分担執筆する。一点に注目しておくと、「第 17 章 さよなら未明一「童話伝統批判」と現代児童文学の成立」は宮川健郎執筆、タイトルで鳥越（・古田）史観にもとづく内容とわかる。つまり、同書が鳥越責任編集である刻印になっている。（カッコ内原文）

私が執筆した第 17 章は、鳥越信が草案を書いた「少年文学宣言」がきっかけになって「童話伝統批判」が起り、詩的で象徴的な「童話」を克服して、散文的な「現代児童文学」が成立した道すじを述べたもので、これが、まさに宮崎さんのい

う「鳥越史観」なのである。私は、宮崎さんの遺著を読んだときも、あのとき、鳥越先生の本を書き写したからなと思った。私は、「戦後児童文学革新まで」という副題のある『日本児童文学案内』から、「鳥越史観」を学んだ。「児童文学のあゆみ展」の書類の紙袋を捨てたとき、この中のものは身についたと考えたのは、「鳥越史観」がすっかり身についたということだったのだろう。

たしかに、2001（平成13）年の「さよなら未明—「童話伝統批判」と現代児童文学の成立」は、「鳥越史観」そのものだったかもしれないけれど、その後、私の児童文学史観が書き換えられなかつたわけではない。これについては、沖縄の「児童文学のあゆみ展」のあとに経験した二つの児童文学史展のこととともに、次回に書く。

ニューヨークステーキ

1979年の沖縄に話を戻す。

タイムスブックフェア（児童文学のあゆみ展）がスタートする前日、鳥越先生と私は、午前9時10分羽田発のANAで沖縄へ飛んだ。午後は、デパートの展示会場の確認をしたのだと思う。そして、夕食をとりながら、先の鳥越先生と徳田渕先生の対談が行われた。記事の「上」には、おふたりが向かい合っている写真がのつていて、その下には（那覇市・「美栄」で）と記されている。沖縄料理の店だ。私は、おふたりの話をずっと聞きながら、ごはんを食べていた。

いそがしい鳥越先生は、その翌日、「児童文学のあゆみ展」がはじまった日にもう帰京したのだが、私は、会期中、展示会場に詰めて、撤収までいることになっていた。のちに大阪府に寄贈されることになる鳥越資料のなかで何日かをすごしたのだ。会場で何か質問があつたら答えてくださいともいわれていた。解説の執筆など、2か月近くの猛勉強のおかげで、質問にも答えられるような気がしたけれど、質問らしい質問はなかった。

1日めの晩は、沖縄タイムス社のKさんとふたりで那覇のバーに行った。Kさんは、この催しの担当者で、東京でも行き会っている。別れ際に、Kさんは、ふたりで開けたウイスキーのボトルを好きに呑んでいいといってくれたのだが、翌日からは行かなかった。いくらか気おくれがしたし、それではつまらないような気もした。そのあと3日間は、私が入れそうな店をさがして、夕ごはんを食べたり、少しお酒を呑んだりした。ニューヨークステーキというアメリカふうのちょっと硬いステーキを食べたことをおぼえている。1972（昭和47）年の「沖縄返還」からまだ7年しかたっていない時期だった。

展示会の最終日には、Kさんやデパートリウボウの担当者たちと打ち上げをして、翌日午後の飛行機で帰京した。展示会の会期5日間と前後1日ずつ、あわせて1週間の沖縄行きだった。大学の親しい友だちひとり、ふたりにだけ、わけを話して、授業を休んだ。（つづく）